

は50トン以上あり、前年度に比べてよかった。

各地区別にみた場合1966年度は八重山地区67.1トン、宮古地区37.3トン本島及び座間味、渡名喜、伊平屋地区（餌場が本島にまたがっているので一諸にした）168.3トンであった。

1967年度は八重山地区121.7トン、宮古地区51.7トン本島及び座間味、渡名喜、伊平屋地区96.0トンであり、前年度に比べて宮古、八重山地区は増え、本島及びその周辺は減少している。月別にみると1966年度は各地区とも7、8月がよかった。宮古、八重山地区ともに6、7月がよく、本島及びその周辺は8、9月がよかった。

全般に宮古、八重山地区は漁期前半に多く、本島及びその周辺は後半は多い。

餌料魚種別にみると、テンジク、アカムロ類で約60%を占めている。バカジヤコ、ガツン、キビナゴ等がこれにつぐ。初めての試みとして1967年に宮古地区では5・6・7月にわたって台湾より購入のクロイワシ（タイワンアイノコ 15.2トン）があった。

各地区ともウフミ、アカムロ等が多いが、それにつぐものとして、八重山地区では、ヒカー、バカジヤコ、宮古地区ではバカジヤコ、シイラ、本島及びその周辺はガツン、キビナゴ、タレクチ等が多い。

種類別、月別にみると

テンジクダイ類、キビナゴは漁期は4～10月で6、7月が多く漁獲されている。

アカムロは6月～10月で6、7、8月に多い。

バカジヤコは4月～10月で変動が大きい。

シイラーは4月～10月で7、8、9月に多い。

ガツンは7月～10月で8、9月に多い。

タレクチは4月～6月で5、6月に多い。（67年度は9月にも漁獲されている。）

アセチンは5月～9月で6、7月に多い。

ヒカーは5月～10月で8、9月に多い。

ミズンは5月～10月で変動が大きい。

3 沖縄県カツオ餌料の現状と問題点

友利 昭之助

県内で使用されている魚種は、大別すると青エサ（キビナゴ、バカエサ、タレクチ、ミズン）と赤エサ（サネラー、テンジク）に別けられる。青エサは本部、渡名喜、池間、与那国で赤エサは、佐良浜、石垣が用いている。青エサは、出現時期が4～10月にあり、夏場に盛期となる。出現量＝発生量は、年間35～80トンで年変化が大きく、かつ活力が弱く、10日～2週間の蓄養が必要であるが、現状は1晩おいた後、すぐ沖へ持って行く。赤エサの代表であるサネラーはタカサゴの幼魚であり、発育段階において浅所のリーフ地帯に接岸来遊する群を対象にするため、これも青エサ同様、年変化が発生量において大きい。しかし、活力は強い。年間採捕量は、